

府立学校の在り方懇話会障害児教育部会（第7回）の開催概要

1 日 時 平成13年3月22日（木）15：35～16：30

2 場 所 京都府公館 レセプションホール

3 出席者

（部会委員）7名<欠席3名>

（京都府教育委員会）西山教育次長、松本指導部理事、竹岡障害児教育室長ほか

4 概 要

(1) 高等部職業教育について

高等部職業教育の現状について事務局から説明があった。

(2) 意見交換

職業教育の充実について意見交換を行った。

<委員の意見要旨>

- ・ 視覚障害者の職業教育というと、昔から「あん摩、はり、きゅう」が中心であるが、最近では視覚障害のない方がこの分野にも進出されており、視覚障害者の就職がますます厳しくなっている現状がある。「あん摩、はり、きゅう」を中心としながら、情報機器の活用という点も考慮し、今後の方策を検討していく必要がある。
- ・ 知的障害を伴った肢体不自由の子どもたちで視覚障害のある子どもたちは、どちらかというとなり知覚障害や肢体不自由に視点をあてた教育がなされていたが、最近、視覚に視点をあてた教育が求められてきている。そういう子どもたちの自立についての研究も必要である。
- ・ 自分で収入を得、生活していくことの重要性を、企業実習も含めて出来るだけ早い段階からそれぞれの特性に応じて実施することにより認識させることが必要であり、本人だけでなく、そこに関わる全ての者の共通認識とすることが必要である。
- ・ 職業教育を実施するに当たっては、教育・福祉及び労働関係機関のネットワークを構築し、連携を深め、それぞれの段階でそれぞれの生徒に応じた支援を行っていくことが必要である。
- ・ 職業教育について考える際、企業や福祉、地域などとの連携が必要になってくるが、連携の在り方をもっと議論する必要がある。地域や地域の企業が求めている職業教育は何か。関係者が集い、職業教育に関する地域ケアシステムを作る必要がある。そして、領域を超えた共通課題ができることによって、職業教育に広がりができると思う。
- ・ 職業教育と進路指導というのは非常に密接で、高等部1年生の時期から、あるいは中学部に入ったときから進路を見通した教育が必要である。その中で地域や地域の企業と

の連携は重要で、地域の中で生活していく生徒にとっては、地域社会や福祉との連携が大きな課題になると思う。

- ・ 障害の状況や程度、あるいは生徒の特性なども見極めながら、進路を見通した指導が必要である。障害の状況に合わせて、作業種目や作業時間に工夫があってもいいのではないか。
- ・ 最近、子どもたちが非常に多様化しているように感じる。進路先についても養護老人ホームなどの福祉関係やサービス業など多様なニーズが出てきており、就職先もスーパーやクリーニングなどのサービス業が増えているが、やはり物作りに関わった就職先が多いのが現実である。そうした中、企業の方からも情報機器の活用ができる生徒が求められたり、いろいろなニーズが出てきている。それぞれのニーズをしっかりと踏まえながら今後の職業教育を考えていく必要がある。
- ・ 聾学校には京都独特の学科もあり、非常にすばらしい作品を製作されているが、今後、時代のニーズにあった職業教育というものを考えると、情報教育を中心とした学科の見直しが必要である。情報教育と従来を学科を組み合わせながら、時代にあった学科に改編していく必要がある。
- ・ 専門の教員が行う職業教育には、非常にすばらしいものがあり、専門の先生というのは職業教育の要になると思う。専門の先生に来ていただける方法として、社会人講師の活用なども一つの方法でないかと考える。
- ・ 全体会で寄宿舍について意見があったが、寄宿舍の果たしてきた役割は大きかったと思うけれども、いつまでも教育の分野が生活支援をしていくべきではない。それよりも生活のエリアで生活支援体制を組み立てていくべきである。子どもたちの自立を進めていくためには、入所型ではなく、在宅で支援していくべきである。そのためにはどのようなシステムを入れていくのかを検討し、親や子どもの切実な願いに応えていくことが必要である。